

住民参加型の研修医報告会の試み ～医療の在り方を考える～

白石吉彦

【目的】離島の小規模病院にて初期研修医の研修報告会に住民に参加してもらい、当地での医療の在り方を考えるという取り組みを行ったので報告する。

【はじめに】隠岐島前病院（以下当院）は島根半島の北約 40-70km に浮かぶ隠岐諸島の島前（どうぜん）地区にある唯一の入院施設である。島前には西ノ島（西ノ島町）人口約 3,100 人、中之島（海士町）人口約 2,400 人、知夫里島（知夫村）人口約 600 人と 3 つの島があり、それぞれ無床の国保診療所があり、開業医はなく、全て公立医療機関である。当院は一般病床 20 床、療養型 24 床の計 44 床で、対象人口 6,100 人の地域で 1.5 次救急までの受入から在宅医療までを担っている。内科系総合医 6 名で当院、浦郷診療所、知夫診療所をカバーしている。

【方法】当院には年間 10 名強の初期研修医が 1-2 か月毎に地域医療研修として来院し、研修期間の終了時に院内で職員対象に研修報告会を行っている。平成 24 年度からその研修報告会に一般住民にも声をかけ、参加してもらうようになった。月ごとに町村長、保健師、病院ボランティア、老人会、社協職員など様々な団体に声をかけ参加してもらっている。研修医の研修報告後にフリートークで、医療についてさまざまな意見や希望を聞かせてもらっている。

【結果】この 10 年の間に大学病院からの小児科医、腹部外科医の引き上げがあり、現在の総合医が複数で医療を担う体制となった。もともと住民との対話を重視しており、体制移行に関して、ほとんど混乱や不満もなく現在の体制へ移行することができている。離島の小病院で現在も、開腹手術、分娩、血液透析、MRI など行っておらず、緊急時の必要性や経済性も考えながら医療の方向性を探り続けていく必要がある。在宅医療や施設での看取りなどについても一般住民を交えながらこの地域での今後の医療の在り方について議論している。今回この取り組みについて報告をする。